

1998 English Reading / Part I-Text1

全訳

昨年の初め頃に行われた調査によると、アメリカの教員はコンピューターを扱う技術や情報科学の学習が、ヨーロッパの歴史、生物、化学、物理、また麻薬や家庭崩壊のような社会問題の対処の仕方の学習、さらに、スタインベックやヘミングウェイのような近代アメリカ作家の作品や、プラトンやシェイクスピアのような古典作品などを読むことと比較して、「より重要である」と評価した。

こうした見地にしたがって、ニュージャージー州カムデンでは昨年度いくつもの学区に対する援助金を削減したにもかかわらず、コンピューター室の充実のために 1000 万ドルを費やしている。またカリフォルニア州のユニオンシティーでは、ひとつの学区内のわずか 11 校のコンピューターを購入するために、2700 万ドルもの金額を費やしている。ロサンゼルスにあるキトリッジ・ストリート小学校においては昨年音楽の授業を削って科学技術の責任役を雇っているし、マサチューセッツ州のマンズフィールドでは行政側が美術、音楽、体育教員の採用人数を減らし、33 万ドルをコンピューターにつぎ込んでいる。さらに、ヴァージニア州のある学校では美術室がコンピューター室へと変わってしまったという。

このような科学技術の可能性に対する信仰は今に始まったことではない。1922 年、トーマス・エジソンは「活動写真は我々の教育システムを改革する運命にあり、完全ではないにせよ、向こう数年のあいだに教科書の大部分の役割にとって変わるだろう。」と予言している。その 23 年後、1945 年にはウィリアム・レベンソンというクリーブランドにある公立学校のラジオ放送局管理者が、「携帯ラジオが教室の黒板のように当たり前のこととして設置される日がいずれ来る」と主張した。さらにその 40 年後には心理学の分野で名高い B.F. スキナーが 1950 年代後半から 1960 年代前半にかけての自らの「ティーチング・マシーン」導入初期のことを振り返り、「ティーチング・マシーンと計画的な指導によって、子どもたちは普段と同じだけの努力により 2 倍の学習成果をあげるだろう」と書き記している。そしてスキナーの回想が世に出た 10 年後、ビル・クリントン大統領は「黒板のようにコンピューターが教室に溶け込む世界、21 世紀への掛け橋を」との運動を起こした。

よく眺めてみると、この流れには同じ傾向があるのがわかる。つまり、なにかしらの問題を学校に引き起こすことになる、という傾向である。かつては教育行政に携わり、現在はスタンフォード大学教育学教授のラリー・キューバンは、『教師と機器：1920 年以降の教室における科学技術』の中で、次々と起こる技術革新の波がその促進者の期待を裏切ることにより、がっかりするような結末を引き起こすサイクルが待っているのだ、と指摘した。そのサイクルは科学技術開発者の調査によって裏打ちされた大きな期待とともに生まれて

きた。しかしながら教師はそういった新しい道具を実際に教室に持ち込もうとはせず、そのため学力に関わるめざましい進歩もみられなかった。そしてこのことが、問題なのは資金でも、教師の抵抗でも、機能しない学校行政でもない、などといった一貫した反応を招くのである。その一方で教育に科学技術を取り込もうとする者の主張を疑おうとする人はほとんどいなかった。学力が下がり続けてからようやく批判は教育機器に向かうのである。そして学校は新たな科学技術を取り込む方向で動き出し、そしてまた期待を持たせるサイクルが始まるのである。

解答
51-b 52-c 53-d 54-b 55-a 56-b 57-c 58-d

[words & phrases]

< 2nd Paragraph >

district 地域 区域

administrator 役人 運営管理官

< 3rd Paragraph >

revolutionize ~に革命を起こす

noted 有名な

B. F. Skinner スキナー：アメリカの学習心理学者。実験装置のスキナー箱を考案し、それを用いたオペラント条件づけの実験的研究で知られる。

recollection 回想 思い出

< 4th Paragraph >

provoke ~を引き起こす

bureaucracy 官僚機構 官僚制

advocate 提唱者 支持者

lag 遅れ

lucrative 儲かる 金になる

< 概要 >

教育の話というのは比較的身近で理解しやすい話が多いので割合とっつきやすかったのではないだろうか。第2パラグラフではある地域や学校の起こした行動、第3パラグラフではある人物のかつての発言や考えが羅列されている。問題を解くうえではそのそれぞれについて細かく分析する必要はないが、どういった意図で筆者はそのような事例を並べているのかを意識しながら読むようにしよう。

この話は一般的な世の中の動きを述べたうえで筆者の言いたいことを絞っていく形になっているので、筆者の言いたいことというのは後半に固まっている。具体的な話から若干抽象的になるので読み取りの難しいところもあるかもしれないが、それまでに挙げられていた事例を踏まえて筆者の考えを押さえよう。現場で働く「教師」と学校を運営する「行政側」のそれぞれの「科学技術」に対する態度を読み取れると読みやすい。

難易度 E=Easy M=Middle D=Difficult D+=Very Difficult

51-b 難易度 M

近年の調査によって明らかになったコンピューター技術への強い興味に対する筆者の態度とは？

この問題に対する答えが理解できているかどうかでこの文章の理解も違ってくるだろう。作者はどのような態度でこの文章を書いているのか。これは試験ということに限らず文章を読む上で読み取らなければならない一番初歩的で重要なポイントだろう。

一通り目を通してみると、前半で近年の学校は新しい技術を取り込もうと莫大な資金を掛けたり施設を作り変えたりしていることをあげながら、後半ではそれらが「学校に問題を引き起こす」とか、「がっかりすることになる」とか、そのような新しい技術に対するマイナスな面をあげていることがわかる。つまり、新しいものと見ればすぐに取り入れようとする現状に筆者が疑問を投げかけるという態度を取っている。この態度をよく表している選択肢は b の「懐疑的である」だろう。正解は b。

52-c 難易度 E

近年の教育技術の発展に対する行政側の反応に対し、最も困っているであろう教師はどの教師か？

コンピューターの扱いや情報科学を学ぶことが大切だ、という教師の声を聞いて行政はコンピューターに費やす金額を上げたり施設を作り変えたりしたが、こうした動きで困っているのはどの教師であろうか。第 2 パラグラフを見ると、“eliminated its music program last year”とか、“administrators dropped proposed teaching positions in art, music, and physical education,...”などと、芸術系の科目や教師がコンピューター導入による迫害を受けていることがわかる。それによりおそらくこういった科目の先生が困ることになるのだろう。選択肢のなかでは c の“A music teacher.”がそれに当る。正解は c。

53-d 難易度 M

第 2 パラグラフは読み手に何を示唆しているか？

第 2 パラグラフが“In keeping with this view...”という形で始まっているのを見ればわかると思うが、このパラグラフは第 1 パラグラフで述べられたことを受けてそれを展開し

ている。第 1 パラグラフでは教師がコンピューター技術を学ぶことが重要だと考えていると述べられており、第 2 パラグラフではそれをうけた行政側が教育を変えようと動いたのである。このことから、第 2 パラグラフで示唆されていることは教師の動きに行政が賛同したのだ、ということだろう。このことを言い表している選択肢は d なので、正解は d「調査結果と同じ態度をとった」となる。

54-b 難易度 D+

なぜ筆者はエジソンやレベンソン、スキナーの言葉を引用したのか？

引用や事例をわざわざ筆者が挙げるのは具体的な話を持ってきて自分の主張をよりわかりやすく信憑性のあるものにするためである。つまり、引用や事例というのは筆者の主張を読み解く補助をしてくれるものなのである。よって、なぜこうした引用が出てきたのか、という問いを考えるとときには筆者の主張を考えてみるのが近道になる。

この文章では第 4 パラグラフに筆者の主張がよく表れているが、先頭の文章を見ると”a pattern that spells trouble for the schools”と、学校に問題を起こすパターンというものがあると言っている。また、中ほどには”a cycle of disappointment emerged”とも書かれていて、あるパターンやサイクルが良くないものをもたらすという筆者の考えが読み取れる。それを踏まえたうえで第 3 パラグラフを読み返すと、エジソンの映画やレベンソンの携帯ラジオ、スキナーのティーチング・マシンの例に見られる共通したパターンがあるというのがわかる。つまり、かつて教育に持ち込まれようとした新しい科学技術は期待ばかりが大きくどれもうまく機能しなかった、ということである。その見方をはっきりさせるため、筆者は彼らの言葉を引用したのだ。よって正解は b。

ちなみに「ティーチング・マシーン」というのはスキナーによる「プログラム学習」に使用する機械で、彼の理論に従ったプログラムを組み込み学習の効率をあげるものである。画期的なものとして当時注目を集めたが、彼の思うほどに教室に定着はしなかった。

55-a 難易度 E

第 3 パラグラフ中ほどにある”that”は何を指しているか？

「その 40 年後」とかかかれているのが、何の 40 年後だったのか。直前にあるレベンソンの発言から、と考えるのが妥当だろう。正解は a。

56-b 難易度 D+

これまでの新しい教育に関わる技術に対する教師の最終的な態度はどのようであったのだろうか？

第 4 パラグラフをさらっと見ると、誰かが期待していたり誰かが失望していたりという感情の変化が見られるが、その主体が誰であるのかをきちんと読み取ろう。大切なのは新しい技術に対して「教師」がどう思っているか、そして「行政側」がどう思っているか、

である。行政側、つまり新技術を取り入れようとする”promoters”は、大いなる期待を持ってその技術を教育に取り込もうとする。その技術は開発者の”big promises”によって裏づけされているのだから、その期待もことさらである。しかしその一方で第3パラグラフの6行目から始まる文章を見てみると、”In the classroom, however, teachers never really used the new tools”という風に、期待はしているのかもしれないが行政側の態度とは裏腹に割と冷めた対応をしている。教育現場にいる教員のほうは新しい技術を取り込むことに慎重だったのだ。このことから考えると、選択肢の中では「用心・警戒・注意」などといった意味の b. Caution を選ぶのが望ましい。正解は b。

57-c 難易度 M

キューバン教授によると、新しい教育技術がよい結果をもたらさないことの典型的な原因は何か？

ひとつ前の問56で触れたとおり、教育に関わる新しい技術に行政側は大きな期待を寄せていたが、現場の教員たちはそういった技術を教育に用いなかった。そしてその結果”no significant academic improvement occurred”という結果に陥ってしまったのである。つまり、原因は教員たちの新しい技術に対する態度にあったのだといっているのだろう。選択肢 c がその内容に一致する。正解は c。

58-d 難易度 E

最後のパラグラフの要点は何か？

第4パラグラフでは、新しい技術が教育に持ち込まれることで”cycle”がはじまり、それがうまく機能せず効果をもたらさないことで”disappointment”が訪れ、さらにそれを解決するために新しい技術が求められ、また”the lucrative cycle”が始まるのだ、といったことが書かれている。そして、パラグラフの先頭でも言っているように、これはエジソンやレベンソンの例にも見られる”pattern”なのである。つまり、人々は何度も同じことを繰り返すのである。このことをよく言い表しているのは d 「歴史は繰り返す」。よって正解は d。

Part I-Text2

全訳

教皇ウルバヌス二世を知る人は、今日それほど多くない。しかし、これほどまでに人類の歴史に明瞭かつ直接的に影響を与えた人物はほとんどいない。教皇ウルバヌス二世という人物こそが聖地をイスラム教徒から取り戻すために十字軍を呼びかけたその人だからである。1095年11月27日、ウルバヌスは集まった何千もの民衆に対し、歴史上唯一の極めて効果的なスピーチを行った。ヨーロッパにその後何世紀にもわたって影響を与えたスピーチだ。ウルバヌスはスピーチの中で、当時聖地を占領していたトルコ人がキリスト教徒の聖なる場所を荒らし、巡礼者を攻撃している、と訴えた。そしてさらに、すべてのキリスト教徒は聖地をキリスト教のために取り返すべき十字軍として聖戦に参加すべきだと力説した。しかしウルバヌスはそういった利他的な動機のみを訴える以上の策を持つ策士であった。彼は聖地が実り多く富に溢れた、キリスト教徒の住むヨーロッパよりもはるかに豊かな土地であることを伝えた。さらに、教皇は十字軍に参加するものはその罪業を許されるとまで言った。

ウルバヌスのスピーチは聴衆の高尚な動機と利己的な動機とに同時に訴えかけ、熱狂的な心情を呼び起こした。彼のスピーチが終わるのを待たずして聴衆は「神の戦争だ！」と騒ぎ立てた。そしてその言葉こそがその後の十字軍のスローガンとなったのである。これがその後約200年の長きにわたって続いた聖戦の始まりだった。

教皇ウルバヌス二世の歴史上の地位は、彼がいなければ十字軍の遠征がなかったであろうことを考えると確固たるものである。確かに十字軍遠征のための機は熟していた。そうでなければ彼のスピーチも無に帰していたことだろう。しかし、広くヨーロッパに渡る運動を起こすには、誰かしら中心人物となりうる者の統率力が必要だった。例えばドイツの皇帝がトルコ人に対する聖戦を唱え軍隊を率いていたかもしれないが、イギリスやフランスの兵士たちまでもその軍隊に加勢していたかといえは疑わしい。教皇こそが国境を越える影響力をもった西欧で唯一の人物だったのであり、教皇だけが、強大な軍隊が統率されるであろうという希望のもとに、すべてのキリスト教徒を聖戦へと導くことにできた人物なのである。しかし、歴史上のどの教皇もこうした聖戦へと十字軍を導くことができたのかといえはそうではない。なぜなら、あらゆる点においてそう提案することは非常に危険なことだったからである。用心深い統率者は先の見えない提案をするというリスクを背負うことを進んでしようとはしなかっただろう。しかし、彼は行動を起こしたのだ。そしてそれゆえ彼は他の有名な人物以上に歴史に偉大かつ長きに渡って残る影響を与えたのである。

ウルバヌスその人は1099年、第1回十字軍が聖地エルサレムの奪回に成功した2週間後

にこの世を去った。それはローマの彼のところへとその知らせが届くより前のことだった。しかし彼の影響力はその後生き長らえた。十字軍によって西欧は当時西欧よりも発展していたビザンチンやイスラム文明に触れることになった。この文明の交流が、近代ヨーロッパ文明の全盛、ルネサンスの土台をつくり発展することになるのである。

解答									
59-b	60-b	61-a	62-d	63-d	64-a	65-d	66-b	67-b	68-c

[words & phrases]

< 1st Paragraph >

Crusades 十字軍

pilgrim 巡礼者

urge 駆り立てる

altruistic 利他的な 愛他的な(自らを犠牲にして他人を助ける)

< 2nd Paragraph >

arouse 喚起する 刺激する

battle cry スローガン 闘(とき)の声(合戦の時大勢があげるかけ声)

< 3rd Paragraph >

secure 安全な 確実な

inspiration ひらめき 鼓舞するもの

ripe 熟した

reluctant 気が進まない 渋っている

dare to 敢えて(思い切って)~する

enduring 永続する

Byzantine ビザンチン帝国の

flowering 花盛りの

歴史の話は好き嫌いが分かれるかもしれない。好きな人はとことん好きなのだろうが、暗記ばかりさせられてよくない思い出を持っている人は敬遠しがちなのではないだろうか。歴史には流れがあって、その流れにさえ乗ることができれば読み物としては非常に面白い。生身の人間が作ってきた話なので、因果関係もわかりやすいし、「歴史」というものの性質上時間や話の移り変わりも読み取りやすい。苦手な人も頭から敬遠せずに根気よく読んでみて欲しい。

この文章ではいきなり Pope Urban II などという人物があらわれ、「誰だ?」と思うかも

しれない。しかし、筆者が「知っている人は多くない」といっているのだからそれも無理はない。教皇ウルバヌス二世がどのような人であったのか、頭の中に描きながら読んでいこう。

59-b 難易度 E

筆者がこの文章を書いた目的は何か？

筆者は教皇ウルバヌス二世の話をする中で何を言いたかったのか。この文章の主題が問われている。まず第 1 パラグラフに目を通すと、2 番目の文章で "Yet there have been few men whose impact on human history has been so obvious and direct" と述べ、ウルバヌスが歴史的に影響をもった人間であったことを説明している。さらに第 2 パラグラフ、第 3 パラグラフの中で十字軍遠征における彼の存在意義を議論し、最終的に彼がいなければ十字軍、ひいてはルネサンスもなかったであろうと結論付ける。つまり、歴史上それほど有名ではない教皇ウルバヌス二世ではあるが、その歴史上の存在意義については卓越したものがあつた、ということが言いたかったのだ。これを踏まえて選択肢を見てみると、b がそれに近いことを言っている。筆者はウルバヌスという存在の歴史における重要性を解いたのである。正解は b。

60-b 難易度 D

筆者の考えによると、なぜ教皇ウルバヌス二世のスピーチは巧妙だったのか？

ウルバヌスのスピーチが十字軍遠征へと結びついたのであるが、その演説に見られるウルバヌスの「策」はどういうものであつたか。聖戦の主たる目的は "to recapture the Holy Land for Christianity" つまり聖地の奪回にあり、それはいわばキリスト教徒の誇りに関わる動機であつたのだが、ウルバヌスという人物は筆者が "Urban was far too clever to appeal to altruistic motives alone." というような策士であり、聖地に関わる魅力、十字軍に参加することで得られる利益についてもスピーチに織り交ぜ、聴衆の動機に訴えかけたのである。第 2 パラグラフの先頭には "Urban's speech, which appealed at the same time to his listeners' highest motives and to their most selfish ones, aroused passionate enthusiasm in his audience." ということが書かれ、ウルバヌスのスピーチの優れた点が簡潔に述べられている。正解は b 「彼のスピーチはさまざまな種類の動機に訴えかけた」。c はあくまでもスピーチの結果起こつたことであり、スピーチ自体の優れた点ではない。d もスピーチの優れた点ではなく、これは彼の教皇としての影響力によるもの。

61-a 難易度 E

第 2 パラグラフの終わりにある "roughly" に最も近い意味を持つものはどれか？

この単語自体それほど難しい単語ではないが、たとえこの単語がわからなくても文脈を見て、後に "two hundred years" と続いているのを見れば大体意味はつかめるだろう

う。"roughly" というのは、「およそ・概略で」といった意味。選択肢を見ると、a. approximately がまさにそのとおりの意味である。正解は a。b の barely は「かろうじて・なんとか」。

62-d 難易度 M

筆者の挙げるドイツ皇帝と教皇との間の決定的な違いは何か？

ドイツの皇帝は第 3 パラグラフで登場するが、その部分しか現れないので見つけやすい。その部分の記述を見ると、たとえドイツの皇帝が十字軍を動かそうとしても、"it is doubtful that many English or French knights would have joined him"だと筆者は考えている。つまり、ドイツの皇帝の力はあくまでも彼の領地内ではしか通用しなだろう、ということだ。しかしその一方で教皇というのは"Only he could have proposed a project for all Christians to engage in"と言っているように国境を越える絶大なパワーを持っていたのである。これが 2 者のあいだに見られる違いである。選択肢の中でそう言っているのは d。これが正解。教皇だけには広く強硬に行動できるのだ。失敬。

63-d 難易度 D

「聖戦への機は熟した」という事実が考慮しながら、筆者は第 1 回十字軍遠征に関して何を述べたかったのか？

ウルバヌスがスピーチを行う時点ですでに民衆のあいだに聖戦に向かう体制が出来ていたことは 22 行目の"conditions for war were ripe"の記述から読み取れる。そしてその「熟した」状態からいよいよ聖戦へと民衆を動かしたのがウルバヌスのスピーチだったのだ。問 62 でも見たように、教皇には国境を越えたパワーがあったのでその様なことができた。しかし、それでは教皇であれば誰でも聖戦に導くことができたのであろうか。筆者はそうではないと考えている。28 行目からの文章で、"It is not the case, however, that virtually any pope would have proposed a crusade to liberate the Holy Land, for, in many ways, it was an extraordinarily dangerous suggestion."というふうに、他の教皇であれば、たとえその立場を持っていても危険を顧みることによって聖戦へと導くことはなかったであろうと述べている。つまり、たとえ機が熟してさらに指導者が絶大な力を持っていたとしても、当時の時点で行動を起こすことができたのはウルバヌスただひとりだったのだ。それを踏まえて選択肢を見ると、d の「他のどの教皇も聖戦をはじめることができなかった」というのが解答にふさわしい。聖戦を呼びかけることのできる人物の条件をよく読み取ろう。

64-a 難易度 M

本文によると、以下の事例を時間的に正しく並べているのはどれか？

本文で起きた出来事が頭の中でうまく整理できているかどうか。といっても、この問題

で取り上げられているのは本文全体に関わるのではなくて、第 3 パラグラフの初めのセンテンスだけを読めばわかることなのでそれほど難しくはないだろう。この文章さえ正しく読み取ることができれば答えられる。選択肢を見てみると、1.ウルバヌスの死、2.第 1 回十字軍遠征の成功、3.エルサレム奪回の知らせのローマ到達とある。これらを時間的に正しく並べたものが答え。解答のあるセンテンスを見ると、“Urban himself died in 1099, two weeks after the First Crusade succeeded in capturing Jerusalem, but before news of that capture had reached him in Rome.”とあり、1 が 1099 年のある日、2 がその 2 週間前、3 が 1 のいくらかあとだということが読み取れる。彼が亡くなったのが何の後で何の前なのか、というふうに考えれば分かりやすい。正解は a。

65-d 難易度 M

筆者の言うウルバヌス二世の歴史に与えた影響とは何か？

人の記憶には訴えかけないにもかかわらず、ウルバヌス二世が歴史上で大切だと筆者が思う理由は何か。問 62,63 で見たように、ウルバヌスはその力と度胸で十字軍遠征を成功させた。それは彼こそになせる業であり、彼がいなければ十字軍も存在しなかったであろう。正解は d。b もいくらか近いようには見えるが、はっきりした記述は本文にはないし、何より筆者の一番言いたいこととは離れている。

66-b 難易度 D+

以下の聖戦に参加する理由のうち、もっとも「利他的な」ものはどれか？

“altruistic”という単語にはなじみが薄いかもしれないので、若干難しく思うかもしれない。“altruistic”というのは「利他的な」という意味で、反対語としては“egoistic”や“selfish”が挙げられる。本文を注意深く読むと、この“selfish”が 15 行目にあり、“altruistic”と対を成す形で用いられている。つまり、“altruistic”の意味が分からなくても、この部分をうまく読み取ることができれば問題は解ける。大概この手の問題はこのように本文にヒントが隠されていることが多い。ウルバヌスは“selfish”つまり、「利己的な、自分のための」動機を誘う内容をスピーチに織り込んだが、それ以前に“altruistic”な動機も挙げていた。それはいわゆる「利他的」で高尚な動機である、「多くのキリスト教徒のため」という動機である。よって正解は b。その他の選択肢はどちらかというと“selfish ones”だろう。

67-b 難易度 D+

次のうち本文から推測されるものはどれか？

本文にはっきり記述されてはいないが、何が本文によって示されているかを推測するという読解力の問われる問題。選択肢を見て検討すると、c は本文で言っていることと違っているし、d も本文で言おうとしていることから外れるので除外。a は確かに本文か読み取りうるが、しかしそれがはっきりと「推測される」ことであるかといえそうではな

い。ここではbの「名声と歴史上の重要性は必ずしも一致しない」というのが解答として適当だろう。実際この文の頭から筆者は「教皇ウルバヌス二世を知る人は多くない」と言っているが、本文では彼の歴史的な存在意義を強く述べている。このことから選択肢bで言われていることが推測できる。正解はb。

68-c 難易度 M

なぜウルバヌス二世の聖戦への呼びかけは危険なことであったのか？

この「危険さ」を乗り越えてウルバヌスが聖戦を呼びかけたことこそが彼の偉大なところであったのだが、その「危険さ」とはなんだったのか。ポイントとなるのは他の教皇にはそういうことができなかった、と述べている 28 行目からの文章の中の”it was an extraordinarily dangerous suggestion”と、それに続く文章。”Cautious leaders would have been very reluctant to risk making a proposal when the consequences were so difficult to predict.”とあるように、見通しの立たない提案をするということは統率者にとってリスクのあることだったのである。そのことを言っているのは選択肢 c。c の文章中の”foresee”「見通しを立てる」という単語がわかれば簡単。正解は c。他の選択肢の内容はどれも本文中には出てこないなので、もし c をすぐに選べなくても消去法で解ける。

< 注：この解答・解説はサンプルです。実際の解答・解説は問 86 まで続きます。 >

Quotes

John P. Kotter (ジョン・P・コッター アメリカの経営学者)

"Push yourself out of your comfort zone and try new ideas."

「快適な空間から抜け出し、新しいことをはじめてみよう」

< 注：英語の解説には毎回英語の名言を添付しています。 >